



空き家利活用コンテスト2023 最優秀賞



住宅部門

事例 06

## MS邸

解体した古材に残る歴史と文化  
再利用で想いを重ね、未来を紡ぐ家に



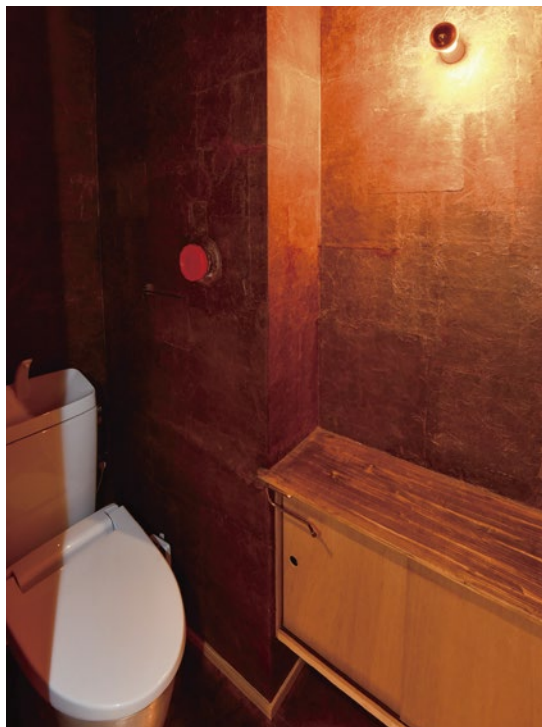
かつて鳥取駅前にあった花街の面影を今に残す、最後の3軒の1つ。「かつてとは異なる健全な形で、鳥取文化を育む場に再生させたい」という熱い想いを胸に、売主・買主・大工・建築士・学者らが集結し、旧遊郭再生プロジェクトがスタートした。

奥行き約26m、部屋数が多い上、増改築が繰り返されていた商業建築の改修は困難を極める。前側3分の1は公共スペース、奥側3分の2を受賞者の自宅とし、その2つが緩やかにつながるグラデーション空間を目指して複雑な構造を整理。その結果、開放感あふれる吹き抜けのLDKが生まれた。音楽ホールのように音響が良く、仲間や家族と楽しく過ごせるという。

また、一つ一つ手作業で解体し、古い建材を再利用することにこだわった。新しい材料が必要な場合は、鳥取の手仕事を取り入れたり、受賞者自らが智頭材を切り出すなどして、記憶や想いが積み重なる家づくりを大切にしたい。古い照明器具を重ねたシャンデリア、袋川に架かる花見橋の欄干を模した渡り廊下の手すり、窓枠や窓ガラスの再利用など随所に往時の面影が残されており、歴史と文化を未来へとつないでいる。

各部屋をつないでいた長い廊下も部屋の一部にした1階のLDK。中央が吹き抜けになったことで明るく、開放感にあふれ、気兼ねなく人々が集える空間に変わった。端から端まで続く作り付けの棚は、食器や雑貨、お気に入りの本など、何を置いても絵になる。





1階・トイレの壁紙には因州和紙を使用。受賞者家族が力を合わせて柿渋を塗り、貼り付けたという。天然素材ならではの自然な濃茶色と和紙の風合いに心が落ち着くよう。



受賞者が自ら智頭の山から切り出したという100年生檜の大梁が見事。ロフトにはカウンターデスクが。勉強や読書に最適だ。解体で出た板材、古い窓枠や窓ガラスを再利用した2階の渡り廊下は、往時の鳥取文化に浸ることができる。





(写真上) LDKの奥にある階段室。踊り場は古材を組み合わせて造作されている。

(写真左下) 1階の一番奥にある洋室。ウォークインクローゼットが洗面脱衣所へつながっており、使い勝手がいい。

(写真右下) 受賞者の子どもが床張りしたという2階の子ども部屋。新たな想いを重ねることで、家への愛着が増す。



[ DATA ]

- 【所在地】鳥取市瓦町 【構造】木造2階建て
- 【築年月】昭和28年頃(鳥取大火後まもなく) 【改修後の用途】住居
- 【間取り構成】個室10室(内6室は未改修)、LDK、ロフト、WIC、納戸、家事室、浴室、トイレ(3箇所)
- 【改修期間】2021年12月～2023年3月
- 【改修費用】約3,500万円
- 【設計者】奥田達郎建築舎 【施工者】令和建設合同会社